



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | ローベルト・ムージルの学位論文：『マッハ学説の判定への寄与』の検討                                                 |
| Author(s)        | 今井, 道夫                                                                            |
| Citation         | 北海道大學文學部紀要, 31(2), 1-32                                                           |
| Issue Date       | 1983-01-31                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/33469">https://hdl.handle.net/2115/33469</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 31-52_PR1-32.pdf                                                                  |



## ローベルト・ムージルの学位論文

——『マッハ学説の判定への寄与』の検討——

今井道夫

### 一、学位論文への視点

特異な未完の長編小説『特性のない男』で知られるオーストリア出身の作家ローベルト・ムージルは、かつてベルリン大学で哲学を専攻し、学位を得た。学位論文『マッハ学説の判定への寄与 (Beitrag zur Beurteilung der Lehren Machs)』は、当時まだ存命であったエルンスト・マッハの哲学説にかんするものであった。一九〇八年に学位を授与され、論文は同年に公刊されている。その後ドイツやオーストリアのしかるべき図書館で探せば閲覧できたであろうが、あまり言及されることなく今日に至っていた。それが先ごろ、彼の工学、心理学にかんする小論とあわせて再刊された。<sup>(1)</sup>これまでこの論文に立ち入ってふれられることの少なかったのは、入手困難であったことに加えてそれが彼の作家としての仕事にさほど密接にかかわっていないとみなされたからであろう。だが最近のムージル研究者によって、たとえば次のようにいわれる。

「社会的、文化的、知的にみてムージルは二〇世紀の入口に立つ過渡的人物であった。必要なのは彼を社会的、歴史的に位置づけ、彼の思想の発展を描き出すような叙述である。このことから要請されるのは、彼の主要な小説だけではなく知られることの少ない政治や文化にかんする評論、広範にわたる日記や遺稿、エルンスト・マッハについての学位論文の検討である。」<sup>(2)</sup>

ところで、この研究者はまた次のようにもいつている。

「マッハの客観性とリルケの抒情的内面性とを統一しながら、ムージルは知性と情感の両方を世界へのより創造的呼応にむけて開放することにつとめ、それにより哲学と文学のあいだの境界を打ち破った。」<sup>(3)</sup>

しかしこれはあくまで大局的に見たかぎりでのことである。より立ち入ってこの辺の問題を考える前提として、科学の合理性、哲学（形而上学）、そしてマッハの思想に対してとるムージルのパースペクティヴが明らかにされなければならない。そしてそのためにも学位論文の検討が必要になってくる。ムージルの学位論文は格別独創的なところはないし、当時もとりたてて良い評価を得たわけではない。しかし一方においてかつては工学を専攻し、後に哲学に移り、結局は作家として自立していったムージルの精神の歩みのうちに、他方において前世紀末より今世紀初頭にかけてのヨーロッパ精神史の流れのなかにこの論文を置いてみると、失敗作といえなくもないこの論文の性格と意味が浮き出るのである。以下ではそうした背景を顧慮しながら、哲学の学位論文としてのその内容と特色を把握することにつとめたい。<sup>(4)</sup>

この論文が学位論文といういわば公的な性格をもつものとして書かれている以上、当時の哲学界の動向とのかかわりを無視することはできない。まずムージルの扱っているエルンスト・マッハについて簡単にふれておかなくてはならな

い。旧オーストリアハンガリー帝国に生まれたマッハは、ウィーン大学に学び、物理学専攻であったがその応用分野、また感覚生理学等に広く関心を抱いた。グラーツ大学をへて長くプラハ大学に在職し、晩年にはウィーン大学の教授になった。よく知られている『力学史』をはじめ『熱学原理』、『光学原理』といった科学史的研究、感覚生理学的知見を多く取り入れた『感覚の分析』、科学上、哲学上のトピックを扱った『通俗科学講義』、『認識と誤謬』などの諸著作が知られている。科学上の業績としては衝撃波にかんする研究、運動感覚にかかわる研究などが知られている。科学の分野でみずから画期的業績をあげるには至らなかったものの、当代きつての物理学者ボルツマンやプランクと科学基礎論上の論争をし、またアインシュタインに影響を与えたとされるなど、当時の科学、哲学の分野で特異な位置を占めていたといえる。

さて、このようなマッハの所論をムージルが学位論文としてとりあげたのはいかなる背景によっているのであろうか。長らくプラハ大学の物理学教授であったマッハが一八九五年にウィーン大学の「哲学、特に帰納科学の歴史と理論」講座の教授に迎えられたことは、当時の学界において彼がこの分野で相応の評価を受けていたことを証するものである。ちなみに伝記的にみるならば一八九五年から一八九八年にかけてがマッハの生涯でもっともはばなしい時期とされる。<sup>(6)</sup>したがってムージルが学位論文のテーマにマッハを選んだことは時期的にみてとりたてて奇異なことではない。ヨアヒム・ティールの編纂したエルンスト・マッハ文献目録<sup>(7)</sup>により我々は当時のマッハにかなする文献の主なものを知ることができる。この文献目録にあがっている一〇〇近くのマッハにかなする文献のうち、哲学学位論文と明記されているものを抜き出してみるならば、ローベルト・ムージル（一九〇八年）、モルトハイル・ルーダーイエフ（一九一三年）、ルードルフ・ティール（一九一四年）、カール・デアハルト（一九一四年）、オイゲン・シュトック（一九

二〇年）、アドルフ・イエンゼン（一九二三年）、ユリウス・ベッカー（一九二七年）、フランツ・カルフェルツ（一九二九年）である。（著者名。かつこ内は刊行年。）これで見ると、ムージルの学位論文はごく早い時期のもののように見えるが、リヒアルト・ヘーニヒスヴァルト（一九〇三年）をはじめこのほかにも実質上学位論文であるものが他にいくつあるのか、ムージルのそれがはしりであったわけではない。

マッハの諸著作の反響は哲学界の外でむしろ大きく、哲学界における議論もそれに触発された面が多分にあったといえる。科学基礎論的分野における反響はもちろんのこと、マッハの実証主義とマルクス主義の融合をはかる動きまであらわれた。レーニンがこれに対して『唯物論と経験批判論』を世に問うたのは一九〇九年のことである。ムージルもこのような一般的思想状況と無縁であつたとは思われない。しかしムージルの論文は哲学学位論文として構想されたのであり、したがってその位置を考えるにあたっては当時の哲学界のなかでみてゆくのがまずは順当であろう。これにかんじて我々はハンス・ヘニングの叙述を参照することができる。

ハンス・ヘニングは一九一五年に一書を公けにし、マッハについての標準的解説をおこないあわせてマッハに対する誤解を取り去ろうとした。<sup>(8)</sup> こうした誤解は特にカント主義の立場をとる哲学者においてめだっている。ヘニングは序文で「マッハの『認識論』にかんするカント主義的傾向の無数の学位論文<sup>(9)</sup>」という言い方をしているが、「無数」というのは誇張であるにしてもその頃までにその種の学位論文がかなり眼につくようになっていたことをそれは示唆している。ヘニングによれば、これらは「まったく無価値である」<sup>(10)</sup> この種の学位論文として彼は次の五つをあげ、それぞれについて短かい批判を加えている。

(一) リヒアルト・ヘーニヒスヴァルト、『マッハ哲学の批判のために』、ベルリン、一九〇三年。

(二) ベルンハルト・ヘル、『エルンスト・マッハの哲学。現実と価値についての認識批判的研究』、シュトゥットガルト、一九〇七年。

(三) フェルディナント・ラインホルト、『マッハの認識論』、ライプツヒ、一九〇八年。

(四) ローベルト・ムージル、『マッハ学説の判定への寄与』、ベルリン、一九〇八年。

(五) ヘルベルト・ブツェロ、『エルンスト・マッハの認識論の批判的研究』、『カント・シュトゥーディエン』別号、第三卷、一九一一年。<sup>(1)</sup>

ここでムージルの論文は世紀初頭より出始めた、マッハ認識論批判をめざすカント主義的な一群の学位論文のひとつに数え入れられているわけである。いまヘニングの主張に立ち入ることはできないが、ムージルの論文についてはそれがヘーニヒスヴァルト論文をそれに含まれている誤解とともに継承しており、ムージルの批判によって「マッハ学説ではなくムージルの構成にかかる妖怪が打ち倒されているだけである」としている。ヘニングの見解の当否はしばらくおくとして、ムージル論文をカント主義的傾向——あるいは新カント主義的といった方がより明確であろうが——の学位論文のひとつすることは十分根拠があると思われる。したがって我々が次にムージル論文の内容を検討してゆくにあたっては、それがこうした性格づけにつきるものかどうかという点に注意をはらってゆきたい。

しかし、このような外的状況とならんで、なぜムージルはマッハを学位論文のテーマに選んだのか、そこで何を意図し、また出来あがった論文をムージル自身がどのように受けとめていたかという内的状況が問われなければならないであろう。作家ムージルを考える上ではむしろこうした主體的問いの方がより重要でなければならない。とはいえ彼の『日記』、『書簡』等をひもといてみても、マッハないし学位論文に言及している箇所は少なくまた断片的なものでしか

ない。それゆえまず学位論文の内容に即して検討し、その上で多少ともそうした点にふれてゆきたい。

## 二、学位論文の要旨

ムージルの学位論文は特にきわだった主張をしているわけではない。したがって学位論文の特徴をつかもうとするなら、その叙述の全体の調子に眼を配ってゆく必要がある。そこで、ここでは必ずしも明確とはいえない論文の展開を、順を追って概観しておきたい。<sup>(13)</sup>

### (一)、序論。——課題設定—— S. 5—12)

論文は次のような直截な調子で始まる。

「認識論的ないし形而上学的諸問題が今日、精密哲学によって討究されるときはいつでも、自然科学者のことばが重きをなしている。世界の像が自然発生的に哲学者の頭より生起する時代は過ぎ去った。」(S. 5)

そして哲学は精密科学研究の手段と成果を顧慮しながらみずからの立場を構築しようとしている。

さてここにひとりの自然科学者、すなわちマッハがいて、その主張するところによれば、このような哲学の側の努力において多くのまちがえがみられる。それは哲学者が考えている自然科学と実際の自然科学とがちがっているからである。そうすると実際の自然科学はどのような論理によっているのかということが問題になるが、この点についてのマッハの見方をムージルは六項目にまとめる。すなわち、自然科学がおこなうのは事実の説明ではなく記述であること、事

実の要素間の函数關係の確立であること、進化論にもとづく經濟の立場によつて科學の役割が理解されること等々のマッハの見解が整理される。ムージルによればそれらの説を個々にみるならばとりたてて新しいものではない。マッハの特色をみるとすればそれら諸説の組織的なあり方、總体的方向である。つまりマッハがその方法的立場によつて、より確かな統一的觀點を得ており、それとともに精密自然科學の確実な基礎に依拠している点である。だがそのかぎりではコント以來の実証主義ととりたててかわるところがないとみることもできる。そこでムージルが注意をうながすのは自然科學の、とりわけ物理学の主要な潮流がその種の実証主義から離れてきており、実証主義は哲學のなかだけでのものになってしまっていることである。ところでマッハの実証主義は自然科學の研究に由来するものとみられる。それならばマッハが実証主義と自然科學を架橋しえているのではあるまいか。

そこでムージルは我々の研究課題を次のように定める。すなわち「マッハがほんとうに自然科學の正しい、あるいは少なくとも矛盾のない把握から出てくる論理的帰結により彼の諸主張に到達したのか」(S. 11)という問いである。とはいえマッハの敘述は確固とした方法的結構をもつておらずアフォリズム的性格をおび、その主張は著書のあちこちに分散している。その上それらは時として相互に矛盾している。したがってここでの主たる作業はマッハ思想を体系的に割り出し、總括的に理解することにむけられる。すなわちマッハの諸學說を判定するための「單なるひとつの寄与」をしようとするものである。

## (二、認識心理學的、經濟的考察方法。S. 12—32)

そこでまず、科學は事實への經濟的適合であるとするマッハの立場を問題にする。これは認識心理學的考察方法と密

接に関連しているとムージルはいう。ここで認識心理学的考察方法といわれているのは、次のような科学の見方である。すなわち事実の知識のみが科学者にとって価値があり、これが科学の目標であるということがその根本である。ところで個々の事実がいつも手許においておければ問題はないのであるが、そうではないがゆえに、諸事実をできるだけ手許におけるようにそれらに秩序を与える必要が生ずる。そこに科学の役割がある。このように認識心理学的にとらえられた、諸事実の秩序づけとしての科学は、実践的なものに発している。より具体的にいうなら自己保存という生物学的視点のもとにとらえることができるのであり、進化論の考えをこれに適用するならば科学を連続性と経済の視点に置くことができる。すなわち経済的考察方法としてそれを理解することができるのである。

さてこのような「進化的、認識心理学的、思惟経済的考察方法」(S. 21) あるいはいわゆる経済説は認識論の立場からみると、懐疑論にゆきつくものであるとムージルはいう。それは認識論としての基礎を欠いている。それは厳格に定式化されておらず、一義性をもっていない。そして真理を追究する科学を確定するものとなっていない。このようなマッハの説にしたがうなら科学的認識と誤謬の境界も截然たるものではなくなってしまう。それゆえマッハの経済説は認識論としてみるなら懐疑論にゆきつくものとみななければならない。マッハは適合原理により認識論の基礎を据えているかにみえるが、それも仔細にみるならば従来の帰納論に帰着するものである。マッハの経済説は実用的な役割を果たし、価値ある方向づけを与えるものであるが、それにつきるものであって認識論的には格別の意味をもつものではないというのがここでの結論である。

次にムージルは個別的な事柄にむかい、物理学に代表される自然認識の問題にかんして、そこにふたつの思考方向を見出す。ひとつは力学的（機械論的）物理学に対する見方、他は個々の物理学概念の批判である。

まず第一のことについてであるが、力学的立場というのは独立の価値をもつものではなく、経済の立場に役立つかぎりでのみ認められるとするのがマッハの見解である。ムージルはここで近世の物理学史をふり返り、そこに現象の背後にある過程を思想的に図像化する立場から数学的図像化可能性を問題にする立場への移行を見、マッハの立場もこの方向にあるととらえる。それは経済的価値に基準を求めようとするものである。ここでムージルはマッハの記述論をとりあげ、それにより彼の立場を明らかにしようとする。それによれば科学の役割は説明ではなく現象の記述である。当面は類比にもとづいた、したがって図像に頼ることになる間接記述であるが、めざされるのは事実の直接的、概念的表現である直接記述である。このようなマッハの所論においてもっとも重要なことは経済原理を認識させたことである。力学的物理学の目標はこれにかなうかぎりで価値あるものと認められる。以上のようにマッハの見解を整理し、それに就いてムージルは仮説（あるいは記述）の適否はその仮説と事実との一致を基準とすべきであり、それをこえる点について経済が唯一の基準となるのでなければならぬとした上で、マッハの立場を現今の物理学の傾向に見合うものとして認める。

次に第二の個々の物理学概念の批判についてである。質量、エネルギー、慣性、空間、時間、運動、温度等々の概念は経験の示すところのもの以上を含んでいる。正しい世界像を構築するためには経験を越える付加物を切り離さなければならぬ。この概念批判がマッハの重要な業績となっているが、これは彼の経験主義の立場を示すものである。このマッハの立場は経験という確固たる基礎にもとづいて形而上学の不確実さから身を守り、同時に経験の経済的呈示を果

たしている。それがいわばポジティブな面であるとすれば、ネガティブな面として直接的、感性的に経験不可能なことを経験より推論することができないとするマッハの見方がある。ムージルは科学の推論の實際をふり返り、このような経験の踏み超えが科学においてなされており、マッハの側にそれを禁ずる根拠がないという。このようにしてムージルはマッハの経験主義、感覺主義を批判する。

(四、因果概念に対する論難、函数概念によるその置換。S. 56—79)

ヘルムホルツは自然のなかのあらゆる変化は原因をもたなければならぬとする。そして自然科学はこの原因を見出すことをめざしている。マッハはこれに対して異論を唱えるがその理由をムージルは次の四つに整理する。(一)これは同じ状況のもとでは同じ結果が生ずることを前提しているが、それは抽象にもとづくこと。(二)原因とされるものは實際には結果を規定している複合体の一要因にすぎないこと。(三)そして實際にあるのは入り組んだ多様な関係であること。(四)したがって原因から結果への一方向的な関係は考えられず、そもそも原因、結果の名に値しなくなる。これらの事情はマッハをして因果概念を捨て函数概念を採るように促がす。(ただし第一項についてムージルは函数概念をとったときにも問題が残ると指摘している。)マッハの立場は「函数的呈示による因果的呈示の置換」(S. 61)という標語によって表現される。函数的呈示をもっとも適切に実現しているとされる物理学の方程式がここで参照される。ムージルはそこにおいて特徴的なこととして高度の抽象性と形而上学への無関心をあげる。これは現実との接觸面が稀薄化してゆくこととあらわれとみることができる。理論が立てられるばあい、現実との直接的な一致ということではなくもっぱら函数的呈示ということがめざされる。ムージルによればその際、ヘルツなどにあつてはそれが構成主義的に理解されるのに対

し、マッハにあっては経済の原理に根拠が求められる。

ムージルはここで実体概念の問題にふれながらマッハの批判にむかう。マッハは函数概念の立場から実体概念を退ける。万事は函数方程式に存するのみである。これに対するムージルの批判の趣旨は函数關係に対応する対象あるいは実在を考へてはなざいけないうかという点にあるといえよう。方程式は事実の模写をめざすとマッハがみる以上、そこに実在的契機が含意されている。「この対応する実在的なもの」(S. 76)が認識論的に想定されるべきかどうかは措くとしても、それをゆるがせにできないはずだというのがムージルの意見である。また因果性についても、そこに現象の方向性をみることができ、単なる函数的依存關係以上のものを考える根拠があるという。さらにムージルはマッハによって貶められている概念一般の擁護に進む。概念は方程式に依存しているがこの方程式は経済のための手段にすぎないとされる。このように暫定的な状態におかれるならば、ある種の「万物流転」が現出することになる。これに対してムージルは現象の流れのなかにも概念形成のための支点があり、流れにも特性をもつ確固とした機構を想定しうるはずであるという。

(五、「函数的結合」の概念の意義の、自然必然性否認による補完。要素論。最後の矛盾。S. 79—124)

マッハの因果性の批判などをみてゆけば知られるように、マッハは論理的必然性のみを認め、物理的必然性を原理的に認めない。必然性というものの本来の性格からして物理的必然性は存在しないのである。ところがムージルによると、マッハは論理的必然性のうちに心理的必然性をみている。なにがマッハをこうした制限、混同にむかわせたか、どのような連関でそう捉えているのかが明らかにされなければならない。そのためにムージルはまずマッハの思考傾向を

三つにわたってとりあげる。まず第一に説明や理解といわれるものは、実際には単純事実への還元であるとする見方がある。第二は見出された規則の正当性の問題についてであるが、規則は記述的に呈示されるものであるにすぎず、その正当性を証明することはできないという見方である。第三は自然法則の解釈の問題であるが、自然法則を個々の事実の表、あるいはその導出規則、産出規則、想起のための便覧的表示とする見方がある。以上は自然法則、そしてそれを捉えるものとされる理論の性格にかんするものといえようが、これについてムーシルは明晰さと完結性に欠けているという。特に心理学的考察方法がびまんしていることを批判する。必然性の「感じ」、習慣的で強固な「期待」等の心理学的用語の使用にもそれがあらわれている。その理由を明らかにするためにムーシルはマッハの立場をさらに三点にわたって整理した上で、自然必然性は存在しないとするマッハの立場が体系的連関においてもっとも考慮に値するものであると結論する。第三章でみた概念批判についても第四章でみた函数的連関の意義の強調についてもその根底にあるのは自然必然性の否認である。しかし自然必然性のこのような否認と自然科学の法則的認識のあいだに齟齬が生じないかどうかについて説明がつけ加えられなければならないであろう。マッハによれば法則的認識において働いている論理は「抽象」である。それのおこなう模写は事実の単純化、図式化、理想化により重要な側面を抽象することによってなされる。自然必然性の単なる否認にとどまることなく、このようなかたちで自然法則の理想化的、虚構的な性格が強調され、自然科学の法則的把握が救い出される。必然性、規則は自然のなかにあるのではなく、抽象や理想化にもとづく図式化によっている。必然性は自然のうちに虚構的に持ち込まれる。マッハの自然必然性否認の立場はこのようなものである。さてマッハの思想を判定するに先だって彼の究極的思想ともいえる感覚主義、要素論の検討にムーシルはむかう。これはすでにみてきた自然必然性の否認、法則や理論の道具的理解のような認識論的転換に帰着するものであるが、それ

とともに認識論的観点の完成にむけてさらに一步進めようとするものである。このような把握のもとにまずマッハの感覚主義の立場（ムージルはこれを「感覚的分析」の立場とも称している）の基礎にある三つの相関した思想群が取り出される。第一は科学の理論的定式と感覚とのあいだに生ずる落差の問題である。科学の理論的営為と感覚主義の原則とは必ずしも調和するものとは思われない。だがマッハによれば方程式は測定数を含んでおり、この測定において感性的要素にかかわっている。さらに方程式は感性的要素の系列のなかのどの部分から我々の世界像を合成すべきかを指示する秩序づけの原理でもある。理論的定式はこのようにして感性的要素の数量的規則なのである。第二には「物」想定に対する批判がある。それは感覚複合が相対的な恒常性を示していることに根拠をもっているにすぎない。第三は感覚と感覚されるものとの区分、同様に自己の感覚と他者の感覚との区分が誤りであるとする立場である。これは要素論の基本に帰着する立場である。以上のようなマッハの諸思想に対してムージルの側から反論がなされる。そこでの事柄の焦点としては、要素論に即したい方をすれば、科学的把握において扱われる要素は概念的品格をもっているものであり、感性的要素と同一と見ることは問題であるということがある。あわせて要素論をめぐる諸問題、特に要素の一元性とそれの類別の方法にまつわる問題点も指摘される。このようにマッハの感覚主義の具体化としての要素論への疑念が表明され、とりわけこの延長上に果たして科学的把握が基礎づけられるのかどうか疑問とされるのである。

いまや「感覚的分析」の立場が結局自己矛盾に陥ってしまうのか、あるいは種々の疑点にもかかわらず確固とした立脚点たりうるかという根本の問題に立ち戻る。そこでムージルが問題にするのはマッハにおける必然性の否認についてであり、そしてこれについての論評をもって論文をしめくくる。（これがこの章の表題にいう「最後の矛盾」である。）マッハは自然における必然性を否認し、無視している。しかしそれはマッハを矛盾に陥らせる。マッハは研究者として

恒常性、自然の斉一性を前提とすることを容認している。すなわちそこでは自然における必然的關係を認めているわけである。法則的把握は理想化の方法によるとみるならば必然性を前提しなくともよいといえるが、法則の背後にいかなる必然性もないという証明にはならない。また自然必然性の否認を貫いても精密自然科学の成果ならびに要求と一致するという証明もない。法則として捉えられる依存關係は概念的なものであり対象の理想化によっているという事情はその依存關係を虚構とよぶことを正当化し、マッハの主張を支持するものである。しかし依存關係は恣意的なものではなく、經驗に基礎づけられている。ムージルによれば理想化は事実のうちに基礎づけられているのであり、必然性は理想化によって事実の側に持ち込まれるとするのは誤りである。自然必然性の否認はマッハ自身によって明確にされていないため、マッハが自然必然性を認めていたと解釈する可能性も残している。自然必然性を承認するか否認するかはマッハ自身の見解のなかで相争っていたともいえる。こうした諸問題について将来、一義的解釈を与える方途をマッハは示していないのである。ムージルはこのように結論した上で、次のように述べて論文をしめくくる。

「もちろんこのことはここで考量されたような最後のな形而上学的ならびに認識論的な帰結についてのみ妥当する。個々の点については実際に一般に認められているように、マッハの著作はこの上なく輝かしい叙述とこの上なく実り多い刺激にみちているのであるが、その考察はもはや我々の課題の枠におさまらない。」(S. 124)

### 三、学位論文の性格とその評価

ムージルの学位論文は均整がとれているとはいえない。マッハからの引用は多いがその他の文献の引用ないし指示が

皆無に近いのもひとつの特色である。わずかにみられるが、それはF・ローゼンベルガー、『物理学史綱要』(S. 34、35、36)、E・ゴルトベック、『ガリレイの原子論』(S. 36)といったものであつて、古典的哲学文献はおるか当時すでに出ていたマッハを扱った文献の指示もない。形式的にはヒュームなどの名前もあげられているが、多少とも実質的内容をもつて登場するのはニュートン、ホイゲンズ、ヘルムホルツ、マックスウェル、ヘルツといった科学者である。彼の経歴からみて哲学的素養が十分でなかったこと、当時の哲学論文のスタイルになじんでいなかったことが考えられるが、また同時に彼の関心の方向を示しているといえる。論文にはマッハの思想を形式化することなく、その実質を損なうことなく取り出し、検討しようとする態度がみられる。しかし一般的にいつてそれはなほだ困難な作業であり、ためにあとの章にゆくにしたがい論文構成上の無理が生じてきているように思われる。マッハ学説の判定をしなければならぬという必要にせまられてマッハ学説を一面化する傾向があり、他方であくまでマッハに即してゆこうとする意図がマッハの著作からの引用の増加となつてあらわれる。その分裂は最終章に特にめだっている。そして結局、マッハ学説を判定し、批判し去つたあとで、マッハに好意的な結びのことばが補足されることになるのである。

章を追つての展開の筋は必ずしも明快とはいえないが、少なくとも前半は叙述も比較的順調に運ばれている。論文はマッハの多岐にわたる思想をひととおり追つており、それぞれの内容にもかなり立ち入っている。個々の論点について不満の残るところも多い。前半では経済説の問題が大きな比重を占めているが、経済の意味する内容があいまいなままにされている。すなわち生物の自己保存の原理と思考の経済のあいだに断絶がないのかどうか、感覚主義、経験主義が経済説に適うものなのかそれとも必要なら経験の踏み超えをおこなつた方が経済に適うのかがあいまいなままに議論が進められている。また要素論がマッハの中心的思想とされることも多いのにそれにかんする叙述が十分とはいえず、要

素論と経済説との関係にもふれていない。<sup>(14)</sup>とはいえムージルのためにいうならマッハの思想の性格にかんがみて、そのいちいちを正しく評価しなおかつ全体的見通しをつけることはきわめて困難であり、ムージルの論述に不明瞭なところが残ってもなかばやむをえない。ムージルは少なくとも個々の論点にあるていど立ち入って検討を加え、それをおしてマッハ学説の最後の問題点を自然必然性の否認に見出し、それを批判することによってマッハ学説へのひとつの判定の道を示したのである。

ハンス・ヘニングは先にふれたようにこの論文を新カント主義的な（ヘニングはただカント主義といっているが、内容に即して以下、「新」をつけておく）マッハ認識論批判のひとつに数え入れた。みてきたようにムージルは認識論の立場に固執している。自然必然性の擁護についてはそれが法則性の基礎づけと関連しているかぎりでは新カント主義の線にそったものとみることができると。論文の冒頭にみられるような実証科学の評価、あるいは結語にみられるマッハ科学論の評価は特徴的であり、またこの傾向は論文をとおして感じられるのであるが、しかし論文の趣旨を問題にするかぎり新カント主義の立場といつてさしつかえないと思われる。この点をもう少し明らかにするために、この傾向のマッハ批判の嚆矢とされるリヒアルト・ヘーニヒスヴァルトの『マッハ哲学の批判のために』<sup>(15)</sup>と比較してみよう。

この論文は単にマッハ批判の先駆というだけでなく、内容の充実の点でも、さらにはそれがマッハ哲学なるものは存在しないというマッハ自身の発言を引き出した点でも注目に値する。副題に示されているように認識論的立場からのマッハ批判である。すなわちここでは「マッハの認識論の批判的判定」<sup>(16)</sup>がめざされており、「マッハの個々の自然科学的『方法論的視点』は扱わない。<sup>(16)</sup>ヘーニヒスヴァルトは以下の論述においてマッハの所論が認識論としては破綻していることを示すのである。その論述において経済の原理は規制的原理として成り立つにすぎないこと、マッハの立場をと

れば「ヘラクレイトスの万物流転」に陥ってしまい認識の支点が失われてしまうことなどの指摘がなされている。<sup>17</sup>すでにみたようにこうした見方をムージルもまたとっている。全般的にみてムージルにあってはヘーニヒスヴァルトのきっぱりと突き離れたマッハ批判のあとを受けて、むしろよりマッハに即してその論理をたどろうとする姿勢がみられる。そして課題設定においても表明されているように科学の方法や論理の問題にかなりの重点がおかれている。そうした点では傾向のちがいはあるものの、それは両者の立場の相違を示すものとはいえない。かなり決定的な相違となりかねない点があるとすればそれは次の点である。すなわち「主観」ないし「自我」をムージルがほとんどまともに論じていないことである。ヘーニヒスヴァルト論文にあっては、マッハにおいてそれが否定されていることに對する批判が論文の根幹をなしているといってもよいほどである。ヘーニヒスヴァルトによれば、認識論の前提として必ず「主観」が想定されてきたのにマッハにはこれが欠けている。「統一的に持続する、すなわち自己同一的にとどまる自我」が想定されていないマッハの立場にあってはカテゴリーの存立する余地がない。また意識が要素の集合であるなら、要素の集合が要素の集合を認識するというおかしいことになってしまう。さらに経済を考えるばあいには当然その基盤となる主体の存在が前提される。<sup>18</sup>ムージルは客観ないし実在についてはそれを想定すべきであると考え、そこに自然必然性の根拠を求めているのであるが、ヘーニヒスヴァルトにとってこのように重大な位置を占める「主観」や「自我」を直接的主題として論じてはいない。そうするとムージルの論文をヘーニヒスヴァルトに始まる新カント主義的なマッハ認識論批判に加えることは無理ということになるであらうか。

ムージルは自然科学の方法と論理の問題にかんするマッハの議論を重視し、それについての解説にかなりの比重を置いている。ムージルはその意義と価値を認めていたし、そして論文の冒頭に暗示されているように哲学的にも重要であ

と考えていた。「主観」や「自我」の問題が議論の正面に出てこないのはムージルのこのような関心の方向と関連している。とはいえムージルの科学論の独自の問題領域を確保したわけではない。関心の趣くところにしたが自然科学の方法や論理の側面に意を用いたが、論文の基本的方向はあくまでマッハの認識論的批判にあるといつてよい。その際、認識論の基礎たる主観や自我への視角が欠落しており、それは認識論についての自覚が不足していたことを意味する。けれどもムージルが別個の認識論の構想をもっていたわけではない。したがってヘーニスヴァルトのような厳格な新カント主義の立場からは不満足にみえるであろうが、ムージルの論文を新カント主義的なマッハ認識論批判とすることは根拠をもつといつてよい。

さて、我々はムージルの学位論文の性格をさらに進んで考えてゆきたいが、その手がかりになるのは学位論文の審査の資料である。<sup>19</sup>資料からも明らかのようにムージルの学位論文は一九〇七年六月二十七日付で「エルンスト・マッハの見解との関連でみた物理学の認識論的基礎の研究 (Studien zur erkenntnistheoretischen Grundlage der Physik mit Bezug auf die Anschauungen Ernst Machs)」という題で提出されたが、カール・シュトゥンプフの要請で書き改められた。そして題も今のようなものに変えられて翌一九〇八年一月末に再提出され、同年二月二十七日に試験を受け三月十四日付で学位を授与された。論文審査に主としてあたったのはカール・シュトゥンプフであり、アロイス・リールがそれに加わっている。試験にはこの二人のほか数学者ヘルマン・アモンドゥス・シュヴァルツ、物理学者ハインリッヒ・ルーベンスが副専攻科目を審査するために加わっている。論文、試験ともに並みの成績であった。<sup>20</sup>論文は公平にみて格別すぐれているとはいえないであろう。みずからの問題意識により解明しようとする意欲も感じられるのであるがそれを十分貫くことができず、むしろそれが災いして論文の体裁をくずす結果にもなっているからである。

審査にかんして資料的に興味を引く点があるとすれば、それは当時の哲学界・心理学界の重鎮であつたシュトゥンプフの評価である。シュトゥンプフが「最初書き直しのために学位志願者に差し戻した」理由は何か、論文はどのように書き改められたのか、最終的論文に対するシュトゥンプフの評価はどうであつたか、を仔細に知ることは資料が十分でないためできない。最初ムージルがマッハを肯定的に扱いすぎているためシュトゥンプフはこれに満足できず書き直しを求めたということは、十分考えられることである。さてそうして出来あがつた論文についてシュトゥンプフは次のような講評を下している。

「『著者のマッハ学説への』批判はそのどこにおいても内在的なものである。著者は必要ないどをこえるものではないが、どのように人はある立場から別の立場へと無抵抗に駆りたてられ、ついには内的矛盾にさらされることになるかを示すという積極的姿勢もとうと努めている。種々の点で著者はさらに事柄について説明し闡明にして、形式については穩当なものにしなければならぬであらう。」<sup>(23)</sup>

簡明、適切な講評といえる。この最後の部分が、論文が並みの成績にとどまつた理由を示しているといつてよいであらう。しかしさらに立ち入って次のように問うてみたかどうか。すなわちシュトゥンプフは基本的な点で論文に対して不満をもっていたのであろうか。あるいは換言すればムージルは書き直す際も「自説を貫き通し」たのであろうか。このことを考えるためにはシュトゥンプフのマッハ認識論に対する立場を知っておく必要がある。

両者の認識論上の対立点を手とりばよく知るためにはマッハの「感性的要素と自然科学の諸概念」(一九一〇年)<sup>(24)</sup>を参照すればよい。マッハはこのなかでシュトゥンプフに対して反批判をおこなっている。その際シュトゥンプフの側からの批判の要点を抜萃しているので両者の対立点が明瞭になっている。シュトゥンプフはマッハの「感覚一元論」を

批判する。自然科学が対象とする法則的連関は感性的現象のうちには存在せずその彼岸にあり、また意識からも独立したところにある。感性的現象は純粹数学的世界の研究にとっての出発点の意義しかもたない。このことは心理学のばあいも同様である。これに対してマッハは「感性的現象のうちには、法則が少なくともはつきりとした痕跡の形でなり含まれているのでなければ、私共はその法則を読み込む一切の権利を失うことにならないでしようか」と反問する。<sup>(25)</sup>「感性的現象の彼岸」は物理学者の探究すべきものではなく、意識から独立した存在を立てる必要もないとマッハは考える。<sup>(27)</sup>ここで引用されているシュトゥンプフのマッハ批判は一八九六年の国際心理学会で発表されたもので、後に印刷に付された。その第三版が出たのを機に一九一〇年にマッハがそれに答えたのである。したがってムージルの学位論文の提出された時期において右のマッハの答弁はまだなされていなかったが、シュトゥンプフとマッハとのあいだの認識論上の相違は以上のような水準にあったとみてよい。さてこの論争点はムージルが自然必然性ということと扱った事柄に直接かわってくる内容をもっている。当然ムージルはシュトゥンプフのマッハ批判についてはよく知っていたであろう。ところがムージルの論文はすでにみてきたようにシュトゥンプフ対マッハの論争点にいまひとつかみあつてこない。あるいはかみあうように書かれていない。それゆえムージルがシュトゥンプフの問題にした点についてどう考えるのが明確ではない。少なくともこの点でシュトゥンプフが不満をもったことは十分ありうることである。ムージルはシュトゥンプフの側に近いとみることもできよう。しかしまたマッハをシュトゥンプフがみているよりも、より好意的にみていることもまた確かである。ずっと後の書簡(ヨーゼフ・ナードラー宛、一九二四年十二月一日付)のなかでムージルは次のようにいっている。

「博士号を取る前に私は『少年テルレスのまどい』を発表しました。この本の成功は残念なことに、ベルリン大学の

私の師シュトゥンプフと気まづくなり、それに業を煮やして助手としてグラーツに来てそこで教授資格を得るようにとのマイノングの招きをも私が断ることに役立ったのです。<sup>(28)</sup>」

このような感情のもつれはあったであろう。しかしこれは事の一面であってシュトゥンプフとの関係にあって哲学研究上の志向の相違の方が深刻であつたにちがいない。それが右のような感情面のもつれを増幅したのである。以上のような次第で、ムージルは論文においてみずからの方向をあるていど貫いたとみてよいであろう。とはいえムージル自身確たる立場を見出していなかったのであるから、自説を貫いたというほどのことではない。つまり哲学的立場というよりは哲学研究上の志向の相違の方が問題であつたのであり、そしてそれは「しようとすることは自分自身のうちから引き出し、吟味し補足する段になつて助言を求めることがよりだいじなのだと思ひ込んでいた」<sup>(29)</sup> ムージルの哲学研究態度に由来するところが大であつたと思われる。

さてそうして出来あがつたのは、完成度の低い学位論文であつた。形式的にも内容的にも不体裁は蔽いきれない。それはほぼ同じ時期にライプチヒ大学に提出された学位論文、ラインホルト・シュルツ、『マッハの認識論。叙述と批判』と比較することにより明らかとなる。<sup>(30)</sup> シュルツは序文で次のように述べる。マッハの哲学的諸見解に議論が集まつている。マッハにあつては体系的把握が欠けており、そしてマッハ自身そうしたものをめざしてもいないといえる。だがこのマッハの根本思想の上に包括的世界像を築こうとする人も出てきている。それに加えてマッハ哲学に対する様々の理解が横行してきているおりから、まず、いわゆるマッハ哲学を可能なかぎり文献に即して叙述することを試みる。次にその批判に移るわけであるが、その際マッハの根本思想である要素論を問題にするにしてもそれ自体確固としたものでも一貫したものでもない。マッハの思想を統一的 세계観のようにみなしてこれを批判するなら、マッハのそもそ

もの意図に反したものとなりかねない。したがってここでは主たる力点をマッハの要素論の反駁に置くが、その他これにかかわる諸々のマッハの発言における不統一や矛盾を指摘するばあい、それはマッハの著作に体系的な哲学を見る人にむけられた批判であると理解してほしい。<sup>(31)</sup> ほぼ以上のような立場をとることをシュルツは表明するのであるが、まずはそのない妥当な立場といつてよい。マッハの認識論的根本思想を要素論（要素一元論、感覚一元論ともいわれている）として捉え、これを主たる問題とするといわれているが、シュルツはそれを固定的に捉えているのではないとしており、そのことは本文をみても明らかである。さて、論文は大きく第一部（マッハ認識論叙述）、第二部（マッハ認識論批判）に二分され、序文で述べられた方針にしたがって論述を進めている。この方法は「マッハ哲学」の性格にかんがみて、秩序だった論文を仕上げる上でたいへん便利な方法であるといえる。<sup>(32)</sup> シュルツなる哲学者が<sup>(33)</sup>この時期にマッハを学位論文のテーマに選び詳細に検討し批判した学問的意欲は新鮮なものとして評価されるべきかもしれない。とはいえ当時の哲学界にあってこの種の哲学への関心はさほど鎖されていたとは思われない。ましてシュルツの実行しているようなこの種の「新哲学」の裁断、批判はアカデミズム哲学の内部において要請される作業であつたと考えられる。その意味でシュルツの論文は当時のアカデミズムの哲学研究のパラダイムに見合っていたといえる。すでに出ていたヘーニヒスヴァルト論文との関係でいえば、ヘーニヒスヴァルトはマッハ哲学の解説的叙述に重きを置かなかったが、それをたんねんにおこなっている点でシュルツ論文の意義も十分ありえたといえる。

ではムージルのばあいはどうか。論文は新カント主義的マッハ認識論批判のひとつに数え入れられるが、そうしたものとしてみれば不徹底である。科学方法論の問題に傾斜しているといえるが、そこに独自の思索領域を見出すまでには至っていない。個々の点についてみるならばよい着眼もみられる。たとえば第五章において、マッハにあっては心理学的考

察方法がびまんしており、それが心理学的用語の頻用にもあらわれていて、必然性の把握にもそれが影響しているとされる。しかしそれ以上の分析がなされていないためこの着眼は活かされていない。この論文の意味を求めるとすれば視点の固定していない、流動的な可能性のうちにであらうか。しかしそれもムージル自身哲学の研究を放棄したため、また論文が他に影響を与えるほどのものではなく埋もれてしまったため直接的には無理である。残る道はムージルというひとりの思想家の思想的営為の軌跡のうちにその意味を求めることである。最後にこの点について検討しておきたい。

#### 四、ムージルにとっての学位論文

出版されている日記や書簡の類をひもといてみても直接学位論文ないしはマッハにふれている箇所は意外に少なく、論文の背景を詳らかにするのは難しいのであるが、そこになんらかの手がかりを求めるなら、たとえば一九〇二年五月二十六日の日記に次のように記されている。

「マッハの『通俗科学講義』がおりよくちようど今日、私の手に入った。おおむね悟性的であるがにもかかわらずひじょうに重要な人物が現に存在することを示してくれた。もっともそのことをこれまでもけって疑っていたわけではない——だがこれにより今一度思いをあらたにするのである。」<sup>39</sup>

現在出版されていて我々の見ることのできる日記や書簡のなかで、唯一名ざされているマッハの著書が『通俗科学講義』<sup>40</sup>であることはなかなば偶然のことかもしれない。しかしより注目され、影響力の大きかった『力学史』や『感覚の分析』ではなくこれにふれているのは、まったくのゆきがかりとは思われない。単行本にまとめられた数あるマッハの著

書のなかで、これはその題名の示すとおりもつともポピュラーなものに属する。認識論の問題を扱った部分も多いといえ、全体としては科学上の興味深いテーマについてエスプリに富んだ軽快なタッチで述べている。認識論の問題にふれているばあいでもみずからの関心の趣くところにしがいい自在に論じている観がある。その点、後にまとめられたもうひとつの小論集で、「探究の心理学のためのスケッチ」を試みている『認識と誤謬』に比べてみても、哲学的にはとりとめのない印象を受けるのである。こうした通俗講義では高い知識を前提するわけにゆかないため内容的に制限されてくるが、「にもかかわらず対象を適切に選択することにより探究のロマンと詩を感得しうるようにすることができる」(序文<sup>36</sup>)と述べており、「マッハ哲学なるものは存在しない」(『認識と誤謬』序文<sup>37</sup>)と弁明しなければならなかった後の事情ともちがってめずらしく文学的表現を用いているほどである。ムージルがマッハのこの方面の仕事にまず惹かれたであろうことは想像しうるところである。ムージルは科学的、技術的事柄にも親しんでいた。一九〇四、五年の通俗科学記事や後の一九二二年の応用心理学的記事(これらは今回再刊された学位論文に、付録として収められている)をみて彼が屈托のない筆致でそれらを書きつづっているのが認められる。そして一方における科学的、技術的事柄への関心と他方での哲学的な関心が無理なく均衡を保っていたのがこのマッハの著書であった。試みにそのなかの小論のひとつ「なぜ人はふたつの眼を持つか」をとりあげてみるなら、そこではまず距離認識の問題から説きおこし、人の場所的移動によってこれが得られることを説明する。さらに人の持っている両眼は、ふたつあるというそのことだけでこの距離認識を実現していることを説明する。そして絵画における遠近法のことなどにもふれ、習慣や感官の訓練により同じ物がいかに様々に見えるかということを明らかにしている。こうした叙述をおして、「人の眼を変えるならその世界観を変えることになる」、「本質的に人とは別の眼の備わっている動物、たとえば昆虫にとって自然はなんと別様に見

えることか<sup>(38)</sup>」といった視覚の理解に至るのである。

この種の議論は当時の哲学界の認識論においてはまともにとりあげられないが、これこそ真に興味深い認識論のテーマではなからうか。しかしいづれはマッハ流の不徹底な思考には満足できなくなることもある。あるいは少なくとも哲学を専攻する以上、到底論理的展開の十分でない断片的、素人的思考の次元にとどまっていることはできない。ムージルは認識や科学の問題への関心とマッハ思想への半ばの共感から学位論文のテーマとしてマッハの認識論を選んだのであろうが、それを論文としてどのように具体化してゆくか。マッハ認識論に対するひとつの確固とした見方はすでにヘーニヒスヴァルトによつて与えられていた。しかしこれは新カント主義哲学の立場からマッハを裁断し、片付けたものであつて、ムージルの当初意図したのはこのようなものであつたとは思われない。あえていえば、伝統の哲学ともまた十九世紀の科学主義、実証主義ともちがった二十世紀の哲学を意図し、その萌芽ないし手がかりをマッハのうちに認め、そしてそれを批判的、発展的に論じることがムージルの課題であつたのではあるまいか。これは我々がその後の哲学史をみたとき痛感せざるをえないようにきわめて困難な課題である。すでに哲学への対し方に動揺をおぼえていたムージルは、「意気消沈している。私の論文はいっこうにはかどらず、なんの成果もないままに日はたちまちに暮れてしまう。どうかなつてしまひそんな気がする。それに論文との永劫の格闘、もうこりこりだ」(一九〇七年二月十七日付日記<sup>(40)</sup>)という気分になり、「日々がどろどろした状態で続いてゆく。私は論文にうちふるえているミイラにほかならない」(同年三月十一日付日記<sup>(41)</sup>)といった状況のなかで苦闘を続けることになつたのである。

そして一九〇七年の半ばまでには仕上げ、その後シュトゥンプフの勧告によつて書き改めようやく学位取得を果たしたあと、残っている書簡<sup>(42)</sup>よりわずかに推定しうるのは、彼が満足感ではなくもっぱら解放感のみを享受したようだとい

うことである。そして出来あがった論文は新カント主義的といつてよい方向においてまとめられており、それにつきないムージルの問題意識は一般的な発言において、あるいはむしろ論文の体裁をくずすような叙述においてうかがわれるにとどまる。

しかしこの論文をもって学位を得たことにより、一九〇八年末にはグラーツのマイノングのもとで職を得る道が開けてくる。このほかにも結局うまくゆかなかったがミュンヘンの工科大学就職の話もあったようである。<sup>(43)</sup> ムージルが後に日記のなかで思い返しているように、<sup>(44)</sup> グラーツ行きを受け容れていれば相応のアカデミックな経歴が得られたであろう。伝統的哲学にはしよせんなじめなかったであろうが、当時、実験心理学の分野が独立の地位を確保してゆく時期にあって、ムージルはその能力を発揮しうる場所を見出しえたはずである。その際に哲学学位論文にみられた未熟さは、必ずしもマイナス要素にならないばかりかプラスの要素にも転化しえたと思われる。当時の心理学には先験的、体系的な態度よりは経験的あるいは実験的態度が要求されていたであろうからである。もともとムージルはベルリン大学時代にあつて実験心理学に自信と満足とを見出せず、それから遠ざかっていたとのことである。そしてグラーツに行つても結局は脱落し、文学に移ることになったであらうと述懐している。必ずしもそうだったとは思われない。しかしそのような世間的次元の話を超えて以上詮索することは無益である。ムージルのここでの述懐で重要なのは、自分が哲学を専攻することにおいてめざしていたことに結局自分はそのどおりつけなかったであらうという認識である。

それではムージルが漠然とであれめざしていたものは何か。その端緒すらしっかりとつかまれていなかったがゆえに特定するのは困難であるが、今参照した日記に続く箇所での、次のような反省がひとつの手がかりを与えてくれる。

「私はいつでも倫理学とはかかわりあつてゆきたかったのだが、私に適した入口がわからなかったということは重要

である。言い換えれば私は勉強不足だったのだ。シェーラーはその入口をみつけたのだから。<sup>(45)</sup>

この倫理(学)(Ethik)ということばで表現されるものを彼はめざしていたといえないだろうか。あるいはみずからの哲学的課題として予感していたものを倫理(学)ということばで表現したといってもよい。ある書簡(ヨーゼフ・ナーラー宛、一九二四年十二月一日付)のなかで彼は自分の経歴にふれ、大学で哲学を研究したが、それは主として論理学、認識論、心理学であったといったあと、「私の志向は倫理学にむかっていたのですか<sup>(46)</sup>」とつけ加えている。彼の考える倫理学がどのようなものであったかを明らかにすることはできないが、それにかんすることを一、二述べておきたい。まず思い起こされるのはウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』における倫理学の取り扱いであり、そしてそれにかんするルートヴィヒ・フォン・フィッシャー宛のよく知られた書簡である。書簡のなかでウィトゲンシュタインは「この本の意義は倫理的なものです<sup>(47)</sup>」と語っている。『論理哲学論考』の構成はしかし、必ずしもそうなっておらず、この発言は一面のみを強調しすぎているとみるのが妥当であろう。<sup>(48)</sup>だが、ムージルとウィトゲンシュタインの両者において期せずして「倫理(学)」が象徴的意味をこめて口にされていることは注意しておいてよい。ウィトゲンシュタインにとって倫理学は語りえないものとされたがムージルにとっては(論理的にはなく事実的に)語ることができなかった、語る方途を見出せなかった。そして哲学という形式を捨て、文学の形式においてそれを問題にしたといってもかもしれない。<sup>(49)</sup>ところでムージルが倫理学を志向したといっても、それは論理学、認識論、心理学といったものとは別なところに隔絶されてあったのではない。次のような見方は、基本的には終生変わらなかったように思われる。

「私は……次のことをつけ加えたく思います。私は数学と心理学に立ち入って従事することなしには永続的に実りある哲学的活動を考えることはできません。たとえ哲学の本質をこれらの前提的知識から引き離してとらえるにしても

です。」(カール・ベデガー宛、一九三五年八月十六日付)<sup>(50)</sup>

したがって結果はともかく彼が倫理学に関心がむいていたことと学位論文のテーマにマッハを選んだこととは矛盾するものではなかった。

ムージルは認識論、心理学、あるいは数学や自然科学の論理を把握し、そしてそれを突き抜けて倫理学の問題に至ることにもずからの哲学的課題をみていた。学位論文はできることならそのための基礎ないしは出発点とするはずのものであった。しかし結局彼はそれを果たできなかった。そして伝統的哲学研究にも当時開けてきていた実験心理学的研究にもむかわずに、作家の道を選んだ。文学の形式により倫理学の問題を追究する道を選んだと解することもできるが、そのようにみたばあい哲学と文学のあいだの表現方法の相違、世界把握の方法の差異があらためて問われなければならぬであろう。ムージルの『マッハ学説の判定への寄与』は、学位論文としてすぐれたものといえることはできない。しかし不成功に終わったその叙述のなかに二十世紀の思想的課題に直面した作家の若き日の苦闘の痕を読みとるとき、そしてこの作家の生涯における分岐点をそこに見出すとき、この論文の思想的意義があらわれてくる。

〔文献と註〕

ムージルの著作については次の版を使用した。

- ① Robert Musil, *Beitrag zur Beurteilung der Lehren Machs und Studien zur Technik und Psychotechnik*, Rowohlt, 1980. (Beitrag. と略記)
  - ② Robert Musil, *Tagebücher*, hrsg. von Adolf Frisé, Rowohlt, 1976. (Tagebücher. と略記)
  - ③ Robert Musil, *Briefe 1901-1942*, hrsg. von Adolf Frisé, Rowohlt, 1981. (Briefe. と略記)
- なお註であげた文献以外に次の文献を参照した。
- Wilfried Berghahn, *Robert Musil in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*, Rowohlt, 1963. (邦訳「ヴァイルフリート・ベークハーン『ムジール』」田島・伊藤訳、理想社、一九七四年)
- Henri Arvon, "Robert Musil und der Positivismus", in Karl Dinklage (hrsg.), *Robert Musil. Studien zu*

*seinem Werk*, Rowohlt, 1970, S. 200-213.

前者からは、ムージルの伝記にかなうことで示唆を受けた。

- (1) 文献①。なお再刊されたものは原著のフォックスミリ版である。したがって原著の誤植等はそのまま持ち越されている。なお論文自体からの引用に際しては便宜上、併記されている原著のページ数を本文中に示す。

- (2) David S. Luft, *Robert Musil and the Crisis of European Culture 1880-1942*, University of California Press, 1980, p. 5.

- (3) *Ibid.*, p. 2.

- (4) この作業をルフト自身、あるていどおこなっている。

cf. *Ibid.*, Chapter 2.

- (5) 精神史とのかかわりにおける哲学を問題にする動向がみられる。その近年における収穫のひとつが、ジャンニクとトゥルミンによる『ワイトゲンシュタインのウィーン』である。それとともに哲学をより相対化して精神史のなかの一要素とみる見方も出て来てよいであろうし、そういう視点からはムージルのような例は検討に値するであろう。本稿のテーマとは直接にかかわってこないが、そうした視点からムージルをとりあげている研究者もいる。

cf. J. C. Nyiri, "From Eötvös to Musil. Philosophy and Its Negation in Austria and Hungary", in J. C.

北大文学部紀要

Nyiri (ed.), *Austrian Philosophy: Studies and Texts*, Philosophia Verlag, 1981, p. 9-30.

- (9) cf. John T. Blackmore, *Ernst Mach. His Life, Work and Influence*, University of California Press, 1972, p. 154.

- (7) Joachim Thiele, "Ernst Mach-Bibliographie", in *Centaurus*, Vol. 8, p. 189-237.

- (8) Hans Henning, *Ernst Mach als Philosoph, Physiker und Psycholog*, Leipzig, 1915.

- (6) *Ibid.*, S. VI.

- (10) *Loc. cit.*

- (11) cf. *Ibid.*, S. 182ff.

- (12) *Ibid.*, S. 183f.

- (13) この学位論文の「要約的紹介」がすでに次の文献によってなされている。

中川勇治、「ムージルの哲学論文について（要約的紹介の試み）」、『東北大学ドイツ文学研究室』『東北ドイツ文学研究』第一〇号、一九六六年、一一〇—一三五ページ所収。

読み易いとはいえないが本文に即して要約しており、ムージル論文の概要を知るのに便利である。中川氏の要約のすてにあることにかんがみ、ここでは本文に即した要約ではなく、論文の筋を解説するにとどめる。

ローレンツ・ムージルの学位論文

- (14) これらの諸点について私はかつて検討したことがある。  
拙稿、「エルンスト・マッハの認識論——要素論と思惟経  
済説を中心に——」、『東日本学園大学「教養部論集」』、創刊  
号、一九七五年、一—二四ページ所収、参照。
- (15) Richard Hönigswald, *Zur Kritik der Machschen Phi-  
losophie. Eine erkenntnistheoretische Studie*, Berlin,  
1903.
- (16) *Ibid.*, S. III.
- (17) cf. *Ibid.*, S. 13, S. 17, S. 18, etc.
- (18) cf. *Ibid.*, S. 7, S. 14f, S. 18, S. 19, etc.
- (19) 「学位論文審査資料」として『*Beitrag*, S. 135-140 に収  
録されている。以下の論文審査にかんする記述はこれによつ  
てゐる。
- (20) 論文、試験の成績は、それぞれ *laudabile*, *cum laude* と  
記されている。*laudabile* は論文に対しての形容詞として用  
いられたことばであつて、*cum laude* と同等であると考へ  
られる。*summa cum laude*, *magna cum laude*, *cum  
laude*, *rite* というのがドイツの大学において一般的な成績評  
価段階のようである。なおこの試験（口述による）の内容、  
経過は公的報告（cf. *Beitrag*, S. 138f.）によつて知ること  
ができるが、ムージルの友人ヨハネス・フォン・アレクシヤ  
宛書簡（一九〇八年三月十三日付）もそれによつて述べてい

る。cf. *Briefe*, S. 51ff. そこでムージルは試験の様子を率直  
に語っている。そのなかで彼は試験の成績について、格別良  
いか悪いかでないかぎり一般に論文と同じ評価になるようた  
と書いてゐる。

- (21) *Beitrag*, S. 136.
- (22) 中川氏は典拠を示していないが、そのように述べておられ  
る。中川、前掲論文、一—四ページ。
- (23) *Beitrag*, S. 136.
- (24) 中川、前掲論文、一—四ページ。
- (25) この雑誌論文は後に他の一編とともに小冊子としても出さ  
れ（一九一九年）、さらに『通俗科学講義』の第五版（一九  
二三年）に収録された。原著が手許にないため次の邦訳書所  
収のものを参照した。
- エルンスト・マッハ、『認識の分析』、広松・加藤編訳、法  
政大学出版局、一九七一年。
- (26) 前掲訳書、八九ページ。
- (27) 以上については、前掲訳書、八八ページ以下、および九九  
ページ以下の原註を参照。
- (28) *Briefe*, S. 367.
- (29) *Tagebücher*, S. 919.
- (30) Reinhold Schultz, *Die Machsche Erkenntnistheorie.  
Darstellung und Kritik*, Berlin, 1907. 事情は定かではない

が著者は翌年名前を変えて Ferdinand Reinhold, *Machs Erkenntnistheorie*, Leipzig, 1908. としつ再度出版している。(フーリングがカント主義的マッハ認識論批判の学位論文の第三番めにあげてゐるものである。)

(31) Reinhold Schultz, *Op. cit.*, S. 5f.

(32) もちろん内容的に平板になりはしないかという危惧はある。私の知るかぎり、後にフランク・カルフエルツも学位論文においてこの方法をとつてゐる。

cf. Franz Kallfeld, *Das Ökonomieprinzip bei Ernst Mach. Darstellung und Kritik. Das Prinzip der Maximalleistung des Denkens*, München, 1929.

(33) 論文に付されている履歴書によればシュルツは一八八三年生まれ。一九〇三年に歴史を学ぶためにシュンホン大学に入り、そこで文芸史に興味をもち、翌年ライプツヒ大学に移つた。そこで後に哲学の問題にむかつた。特にマックス・ハインツェの指導を受けた。なお論文審査にあたつたのはマックス・ハインツェとヴィルヘルム・ヴントで、一九〇七年七月三十日付で学位を授与されている。シュルツがその後どのような経歴をたどつたかは不明である。

(34) *Tagebücher*, S. 20.

(35) *Populär-wissenschaftliche Vorlesungen*. これは第三版(一九〇三年)、第四版(一九一〇年)、第五版(一九二三

年)と次第に増補され、最初十五講だったものが第五版にいたつては三十三講になっている。ムーシルの手にしたのは初版(一九〇六年)か第二版(一九〇七年)である。

(36) Ernst Mach, *Populär-wissenschaftliche Vorlesungen*, 4. Aufl., 1910, S. VIII.

(37) Ernst Mach, *Erkenntnis und Irrtum. Skizzen zur Psychologie der Forschung*, 5. Aufl., 1926, S. VII.

(38) Ernst Mach, *Populär-wissenschaftliche Vorlesungen*, 4. Aufl., 1910, S. 93.

(39) たゞしばしばムーシルがムーシル自身と対話するといふかたちをとつた一九〇五年五月十三日付の日記、参照。 *Tagebücher*, S. 149f.

(40) *Ibid.*, S. 208.

(41) *Ibid.*, S. 209.

(42) ヨハネス・フォン・アレクシエ宛(一九〇八年三月十三日付)、フランク・フライ宛(同年四月十二日付)書簡、参照。 *Briefe*, S. 51ff.

(43) このあたりの消息については、アレクシス・マイノング宛、一九〇八年十二月三十日付、および翌年一月十八日付書簡、参照。 *Ibid.*, S. 61ff.

(44) 以下にうつては一九三〇年代末に書かれた日記によつてゐる。 *Tagebücher*, S. 918f.

ローベルト・ムージルの学位論文

- (45) *Loc. cit.*
  - (46) *Briefe*, S. 367.
  - (47) Ludwig Wittgenstein, *Briefe*, hrg. von B. F. McGuinness und G. H. von Wright, Suhrkamp Verlag, 1980, S. 96.
  - (48) 黒崎宏、『ウイットゲンシュタインの生涯と哲学』、勁草書房、一九八〇年、一二四ページ以下、参照。
  - (49) 次の文献は、間接的にはともかく直接的交渉のなかったム
- ーシルとウイットゲンシュタインの思想的平行関係をスケッチしており、むしろ独立に展開された両者の思想のあいだに平行関係を見出しうるこの意義を重視すべきだとしている。
- J. C. Nyiri, "Zwei geistige Leisterne: Musil und Wittgenstein", in *Literatur und Kritik*, 113, 1977, S. 167-179.
- (50) *Briefe*, S. 652.